



NIPPON BEARING

12月19日付 日本経済新聞広告 『かくれ雑学』詳細

【箱根駅伝は元々 アメリカ大陸横断駅伝の予選会だった】

2018年に94回目を迎える箱根駅伝、今ではすっかり新春の風物詩ですね。この箱根駅伝、実は《アメリカ大陸横断駅伝の予選》として誕生しました。箱根駅伝が別の大会の予選だったとは、驚きです。では、箱根駅伝がどのようにして誕生したのか、少し時代を遡ってみましょう。

5月の『かくれ雑学』にも登場した、日本マラソンの父とも呼ばれる金栗四三さん。金栗さんは、1912年に初めて出場したストックホルムオリンピックで、レース中に倒れるという苦い経験をします。（詳細は、5月のかくれ雑学をご覧ください。）
帰国後、「世界で通用する長距離選手を育成したい」と考え、大学対抗駅伝の構想を練っていく中、他の陸上選手との話し合いの中で、《アメリカ大陸横断駅伝》という案が出されました。1920年2月、アメリカ大陸横断駅伝の選考会として、第1回箱根駅伝が開催されました。

駅伝そのものの誕生は、箱根駅伝開催の3年前、1917年でした。東京奠都半世紀の記念行事として、京都・三条大橋～東京・不忍池までの約500kmもの距離を、昼夜をまたいで23人のランナーがつなぐレースでした。この時、東軍のアンカーを務めた金栗選手にとって、この駅伝の成功もまた、箱根駅伝を開催する大きな原動力となったようです。

日本ベアリングは、1939年に工作機械メーカーの協力工場としてスタートしました。当初、ゲージや工作機械の製造をしておりましたが、1960年にスライドブッシュを開発。1963年には、社名を現在の《日本ベアリング株式会社》に変更し、直動ベアリングのパイオニアとして本格稼働します。1998年には、スライドブッシュ全般の開発で科学技術庁長官賞を受賞するなど、スライドブッシュは日本ベアリングの主力商品の一つとなりました。

その後、《アメリカ大陸横断駅伝》が実現することはありませんでしたが、選考会として誕生した《箱根駅伝》は、私たち日本人にすっかり定着しています。スタートのきっかけは何であれ、今行っていることを実直に守り、地道に努力を続けていくこと。それこそが、長年愛され後世まで続いていくものとなるのでしょうか。

【企画・協力：㈱学研エデュケーショナル】